

石走山遺跡Ⅱ

2006

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

石走山遺跡Ⅱ

2006

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター



遺跡上空より瀬戸内海方向を望む



4号墳（上空より）

序

本書は、農免農道整備事業波野川西地区工事に伴い山口県の委託を受けて財団法人山口県ひとつくり財団が実施した、石走山遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する田布施町とその周辺には多くの遺跡が存在し、特に古墳の集中する地区として知られています。

今回の発掘調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落の一部と古墳3基が発見され、この地域の古代社会の様相を窺い知る資料を追加することができました。

本書が、文化財保護への理解を深め、学術研究や郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを願うものです。

最後に、調査の実施ならびに報告書作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山口県ひとつくり財団
理事長 村岡正義

例 言

- 1 本書は山口県熊毛郡田布施町大字川西に所在する石走山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は農免農道整備事業波野川西地区工事に伴い、財団法人山口県ひとつくり財団が山口県の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 文化財専門員 岩崎 仁志
文化財専門員 森下 穂雄
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県田布施農林事務所、田布施町教育委員会ならびに地元関係各位の協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図「柳井」を複製使用した。
- 6 本書に使用した方位は国土座標（日本測地系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 本書に使用した土色の表記は下記に準拠した。

農林水産省農林水産技術会議事務局（監修） 「新版 標準土色帖」2004年
- 8 図版中の遺物番号は実測図の遺物番号と対応する。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

SB：建物跡 SK：土坑 SD：溝 ST：墓 SX：その他
- 10 本書に掲載した挿図・図版の作成および執筆は岩崎・森下が共同で行い、岩崎が編集した。

本文目次

1	遺跡の位置と環境	1
2	調査に至る経緯と調査の概要	3
3	調査の成果	5
1)	主な遺構	5
a)	集落遺構	5
b)	埋葬遺構	10
2)	主な遺物	17
a)	土器	17
b)	鉄製品	20
4	まとめ	20

挿図目次

第1図	石走山遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図	調査区設定図	3
第3図	遺構配置図	6
第4図	竪穴住居跡 (SB201) 実測図	7
第5図	竪穴住居跡 (SB201) 遺物出土状況図	8
第6図	掘立柱建物跡 (SB202) 実測図	8
第7図	土坑実測図	9
第8図	溝実測図	10
第9図	石蓋土坑墓 (ST201) 実測図	11
第10図	壺棺墓 (ST202) 実測図	11
第11図	壺棺墓 (ST203) 実測図	12
第12図	4号墳実測図	13
第13図	4号墳周溝土層断面図	14
第14図	4号墳埋葬主体実測図	15
第15図	5・6号墳実測図	16
第16図	出土遺物実測図 (1) 竪穴住居跡・溝・土坑・古墳・その他	18
第17図	出土遺物実測図 (2) 壺棺	19
第18図	出土遺物実測図 (3) 鉄製品	20
第19図	石走山丘陵における遺構の分布	21

図版目次

巻頭図版：遺跡上空より瀬戸内海方向を望む、4号墳（上空より）

図版 1：遺跡遠景（上：南西上空より、下：西上空より）

図版 2：遺跡全景（上：石走山丘陵と調査区、下：調査区全景）

図版 3：遺跡遠景および調査前近景（左上：西より、右上：北より、左下：北より、右下：南より）

図版 4：竪穴住居跡 (SB201) 調査状況（上段：検出状況、下段：掘込み状況）

図版 5：竪穴住居跡 (SB201) 完掘状況

図版 6：竪穴住居跡 (SB201) 遺物出土状況および掘立柱建物跡 (SB202、右下)

図版 7：土坑その他（左上：調査区中央部付近、右上：近代墓坑、左下：SK202、右下：SK204～207）

図版 8：溝および石蓋土坑墓（左上：SD201、左下：SD202、右上・右下：ST201）

図版 9：壺棺墓 (ST202)（上：検出状況、下：鉄鍍出土状況）

図版 10：壺棺墓 (ST203)（上：検出状況、下：壺棺出土状況）

図版 11：4号墳検出状況（上：東より、下：西より）

図版 12：4号墳完掘状況（上：東より、下：西より）

図版 13：4号墳土層堆積状況（左上・右上：周溝、左下：第一主体、右下：第二主体）

図版 14：4号墳埋葬主体（上：並列する埋葬主体、左下：第一主体粘土床、右下：第一主体完掘）

図版 15：5・6号墳完掘状況（上：5号墳、下：6号墳）

図版 16：出土遺物 (1) 竪穴住居跡

図版 17：出土遺物 (2) 壺棺

図版 18：出土遺物 (3) 溝・土坑・古墳・その他

1 遺跡の位置と環境

石走山遺跡は熊本県田布施町大字川西字石走に所在している。本遺跡が所在する石走山は田布施町の中央部を北西から南東に貫流する田布施川中流域の右岸、西方の呉麓山から樹枝状に伸びる丘陵地の最先端部に位置している。本遺跡の北東約2kmには神籠石で知られる石城山がそびえており、本遺跡のある川西地区は対岸の宿井地区と併せて石城山にちなんで「城南」と称されている。

石走山遺跡から周囲を見渡すと、東西には丘陵が迫り、東方は直下に田布施川が流れる交通の要衝となっている。南東方向は開けており瀬戸内海に連なる低地を見おろすことができるが、弥生時代後期の時点においてはその眺望は現在とは違っていたと考えられる。古代海進期には現標高10m以下は海面若しくは干潟であった可能性が高いことが指摘されている。江戸時代の『防長風土注進案』には町の中心部である波野について「東は大嶋鳴戸より南は麻里布の沖へ潮行通い候時、波の打寄せる野という心より波野と呼び習はせし」という記述があり、石走山遺跡の付近までかつては海岸線が迫っていたと考えられている。このことから、古代の石走山は古柳井木道に面した入江を眼下に見おろすことのできる眺望の開けた場所であったと推測できる。

石走山は丘陵地全体が遺跡として知られており、丘陵の南部及び北部に関しては既に発掘調査がなされている。南部には田布施町教育委員会の調査により石走山1号墳及び2号墳の存在が確認されている。1号墳は径10m、高さ4mの円墳で両袖式の横穴式石室を持っており、6世紀後半の築造と推定される。2号墳は1号墳の南約10mに位置する未開口の小円墳である。また、北部には弥生時代の



第1図 石走山遺跡の位置と周辺の遺跡 (○：弥生時代の遺跡、●：古墳時代の遺跡)

台状墓及び集落跡の存在が山口県教育委員会の調査によって確認されている。

田布施町および周辺は県内でも有数の遺跡密集地域であり、本遺跡周辺にも数多くの遺跡が存在している。本遺跡と同時代の弥生時代から古墳時代の遺跡を概観すると、集落遺跡では、県東部最大級の低地性集落遺跡であり、弥生時代から古墳時代にかけての多数の住居跡や墓地在り発見された明地遺跡（8）、弥生時代中期から後期にかけての典型的な周防型土器が出土した奈良ニッ池遺跡（9）、弥生時代後期から終末期の低地性集落跡である松尾遺跡（10）、弥生時代中期から古墳時代初期の集落跡が発見された林遺跡（11）等が存在する。古墳では本遺跡の南方約400mの丘陵上に存在する国森古墳（2）が目される。国森古墳は、張り出し部をもつ方墳という異例の墳丘形態を持ち、築造時期が4世紀初頭と推定される県内最古の古墳で、古墳時代成立過程における地域的動向や畿内勢力との関係などをうかがう上できわめて重要である。このほかにも、5世紀中頃の築造と推定され、本県においては希少な本格的粘土槨をもつ円墳である木ノ井山古墳（3）、6世紀中頃の築造と推定される前方後円墳で、円筒埴輪をもつ納蔵原古墳（7）、田布施川対岸の低丘陵地にあり県内はもとより中国地方でも有数の石室規模を誇る後井古墳（4）が存在する。後井古墳は周防国造の系譜に連なる首長の最後の古墳として位置づけられる。これらに加え、6世紀末の築造と推定され横穴式石室を持つ稲荷山古墳（5）や相ヶ迫古墳（6）等も存在する。

参考文献

- 小野忠憲「山口県の考古学」（古川弘文館 1985）
- 田布施町史編纂委員会編『田布施町史』（田布施町史編纂委員会 1990）
- 山本一朗「石走山第一号墳清掃調査略報」（会誌『田布施地方史研究会 第98号』 1991）
- 山口県教育委員会『石走山遺跡』 1993
- 山口県教育委員会『林遺跡』 1993
- 山口県教育委員会『明地遺跡』 1993
- 山口県教育委員会『明地遺跡Ⅱ』 1994
- 山口県教育委員会『木ノ井山古墳』 1994
- 田布施町教育委員会『国森古墳』 1988
- 田布施町教育委員会『納蔵原古墳』 1996

2 調査に至る経緯と調査の概要

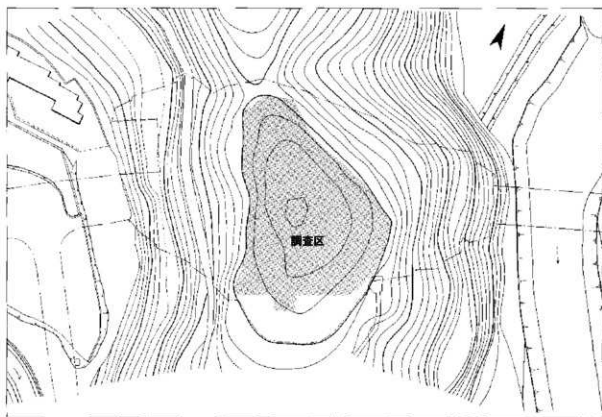
石走山遺跡は南北300m余り、東西約100mの独立丘陵である石走山の尾根上に位置する。この丘陵には古墳ほかの埋蔵文化財が存在することが知られており、石走山古墳群および石走山遺跡として早くから認識されていた。今回発掘調査対象となった地点はこの丘陵の中央部に当たる。

山口県田布施農林事務所により、この丘陵を横断する農免農道建設が計画されたため、事前に遺跡の内容を明らかにして保護策を講じることを目的として平成4年度には山口県教育委員会による発掘調査が実施された。これにより丘陵北端の頂部に弥生時代の集落と墳墓群の存在が確認された。

なお、同丘陵南端付近に存在する後期古墳（石走山1号墳）についても、平成2年度には田布施町教育委員会による調査が実施され、比較的大型の横穴式石室から土器・装身具等の多くの遺物が出土している。

農免農道建設計画をめぐって、平成8年には山口県田布施農林事務所と山口県教育委員会による協議が開始され、遺跡の存在が確認されている丘陵北端および南端を避けるかたちで路線が設定された。その後、工事計画が具体化したことを受けて平成13年12月に山口県教育委員会による試掘調査が実施され、掘削予定地区である丘陵中央部にも集落遺跡が存在することが明らかになった。これを受けて山口県教育委員会と山口県田布施農林事務所との協議の結果、路線内の標高35m以上の部分を中心とする1500㎡を対象として平成17年度に発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査は山口県の委託を受けて、財団法人山口県ひつくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した。



第2図 調査区設定図 (1/1000)

現地における発掘調査は平成17年5月23日に着手した。調査事務所設置・発掘機材搬入のち、雑草除去をおこない、遺構面確認および除去土量把握のために試掘溝の設定・掘り込みを実施した。この段階では土坑と溝が確認され、竪穴住居の可能性のある遺構も確認された。そして重機による表土除去を行ったのち、人力による樹根の除去および遺構検出を実施した。なお、調査区は丘陵尾根上であるため、東西斜面には排土置場の土止めを兼ねた安全柵を設置した。表土除去の結果、弥生時代の竪穴住居は1軒のみであり、当初の予想とは異なって3基の古墳が遺跡の中心をなすことが判明した。発掘調査では人力による樹根の除去に多くの時間を割くこととなり、この作業は6月中旬まで続いた。その後遺構掘り込みを進めるうち、石蓋土坑墓・壺棺墓が存在することも明らかになり、今回の調査対象地区が弥生時代後期から古墳時代後期にかけての墓域としての性格をもつことが明らかになった。古墳のうち最も規模の大きい石走山4号墳については、2基の埋葬主体が存在し、このうち1基は粘土床をもつことが判明した。

調査範囲の中央部には明治時代以降の墓地が存在し、その移転が7月下旬に行われるのを待ってこの地点を調査した。その結果、丘陵最高所にあたるこの地点には土坑数基ほかが存在するのみで、埋葬遺構は存在しないことが判明した。なお、路線南側隣接地に墓地を移転することとなったため、その範囲についても遺構検出をおこなったが、ほとんど遺構は発見されなかった。

各遺構について掘り込みおよび遺構実測・写真撮影を順次行いつつ、7月22日に国土座標杭を設置して、これを基準として8月12日には空中写真撮影および写真測量を実施した。

最終的な遺構実測・遺物取り上げ等のち、8月31日には調査事務所撤収・発掘機材搬出を行い、9月2日には現地における調査をすべて終了した。

3 調査の成果

1) 主な遺構

今回の調査区からは竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑18基、溝5条等の集落関連の遺構と、石蓋土坑墓1基、壺棺墓2基、古墳3基の埋葬遺構が発見された。

集落関連の遺構は弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけてのものであり、今回の調査区北側の平成4年度調査区において発見された遺構群に併行するものといえる。また、埋葬遺構のうち石蓋土坑墓・壺棺墓についても同様である。

埋葬遺構のうち新たに確認された3基の古墳については、平成4年度発見の石走山3号墳（古墳時代前期）と石走山1・2号墳（古墳時代後期）の間を埋めるものと理解でき、これにより古墳時代の全期間を通して石走山丘陵が墓域として認識されていたことが明らかになった。

以下、集落遺構と埋葬遺構に分けて主な遺構を紹介する。

a) 集落遺構

竪穴住居跡

SB201（第4・5図、図版4～6） 調査区北端の東側斜面を掘り込んで造られた方形竪穴住居跡である。幅7.1m、残存する奥行きは3.4m、周壁の最大高80cmで、ほぼ水平な床面に小坑2個（柱穴）と土坑1基（中央穴）をもつことから住居跡と判断した。ただし、床面西側では柱穴は検出されなかった。周壁溝はなく、西半部を中心として床面付近から弥生土器片がまとまって出土した。これら土器のうち、鉢1点（第16図2）以外には復元可能な個体がないことから、本遺構から出土した土器は基本的に住居の廃棄に際して投棄されたものとみられる。

床面にみられる土坑は長径132cm、短径80cm、深さ最大40cmで、底面から鉄銅1点（第18図2）が出土した。

出土土器から、本遺構が廃棄されたのは弥生時代後期前葉ないし中葉と考えられる。

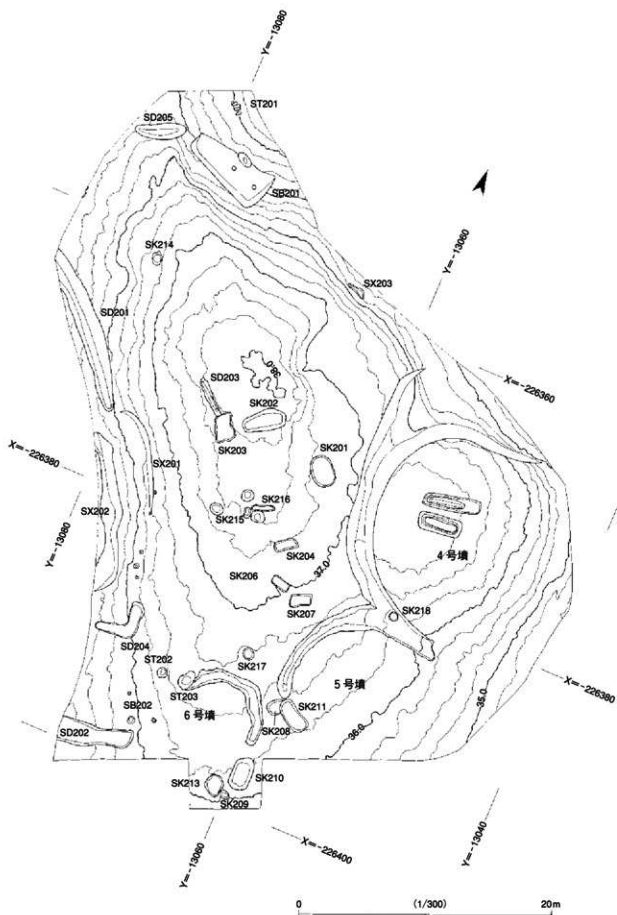
掘立柱建物跡

SB202（第6図、図版6） 掘立柱建物跡を構成する可能性のある柱穴が存在する。北東隅の柱穴を欠くものの、復元される掘立柱建物跡は柱間が1間×1間、柱間寸法が東西約0.9m、南北約1.1mである。柱穴からの出土遺物はなく、時期不詳である。

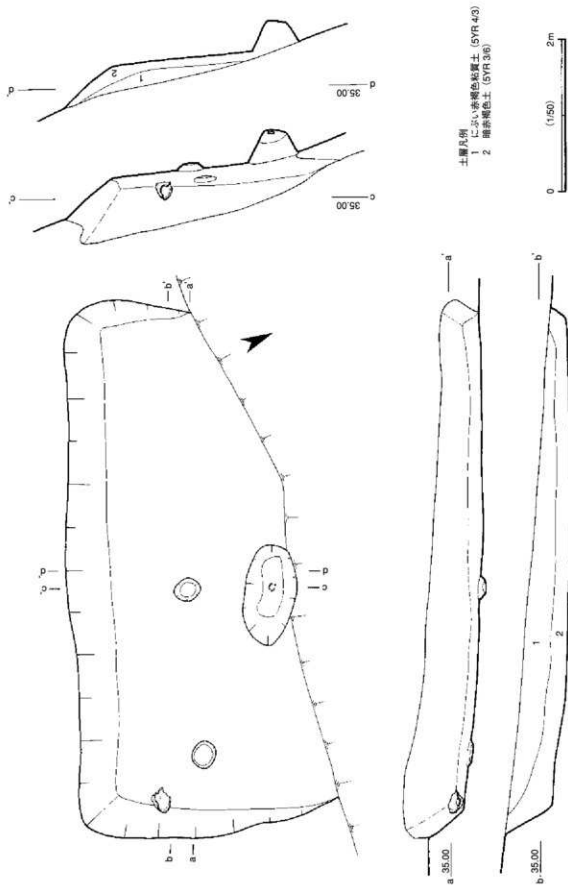
土坑

今回の調査区からは18基の土坑が確認されているが、2基（SK202・203）を除けば、他は無遺物のため時期不詳である。

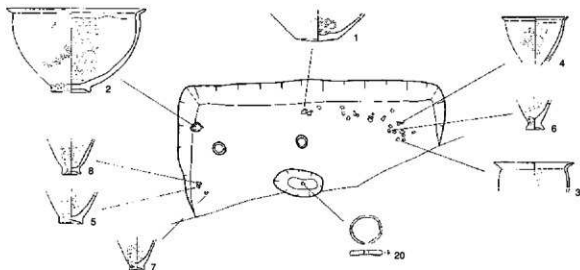
SK202（第7図、図版7） 調査区中央部（丘陵最高所）に位置する土坑であり、土器片若干を埋土に含んでいた。規模は長軸約209cm、短軸100cm、深さ18cm、主軸方位はN50°Eである。出土遺物



第3図 遺構配置図



第4図 竪穴住居跡 (SB201) 実測図



第5図 竪穴住居跡 (SB201) 遺物出土状況図

から弥生時代終末ないし古墳時代前期の遺構と考えられる。

SK203 (第7図、図版7) SK202に隣接する土坑であり、土器片若干を埋土に含んでいた。規模は長軸約139cm、短軸100cm、深さ7cm、主軸方位はN34° Wである。出土遺物(第16図10)から弥生時代終末ないし古墳時代前期の遺構と考えられる。

SK202とSK203は隣接するうえ主軸方位をほぼ直交させることから、何らかの関連をもつと推測されるが、その機能を推測させるものは発見されていない。

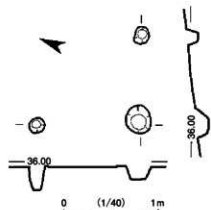
SK210 (第7図) 調査区南端に位置し、長軸約163cm、短軸94cm、深さ9cmの規模をもつ。主軸方位はN2° Wであり、時期および機能を推測させるものは発見されていない。

SK213 (第7図) SK210に隣接する土坑である。長軸約94cm、短軸91cm、深さ7cmの規模である。時期および機能を推測させるものは発見されていない。

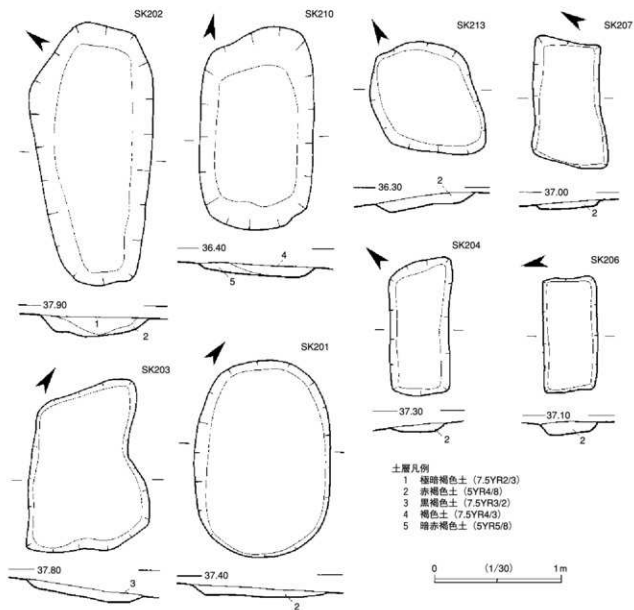
SK204・206・207 (第7図、図版7) 調査区中央部南寄りに隣接して存在する土坑群である。いずれも長方形の浅い土坑であり、規模も大きな差がない。個別の規模は、SK204は長軸112cm・短軸51cm、206は長軸94cm・短軸45cm、207は長軸102cm・短軸60cmの長方形土坑で、深さはいずれも10cm未満である。主軸方位はSK204・207が比較的近く(N50° E・N65° E)、SK206(N75° W)はこれらに対して斜交する。

いずれの土坑からも時期および機能を推測させるものは発見されていない。しかし、これら土坑は近代以降の墓地に隣接する位置にあることや、規模および形態的な特徴等から、墓坑の可能性を有する。

SK201 (第7図) 調査区中央部北東側に存在する長径158cm、短径109cm、深さ6cmの楕円形土坑である。無遺物であり、時期および機能を推測させるものは発見されていない。この土坑は造成され



第6図 掘立柱建物跡 (SB202) 実測図



第7図 土坑実測図

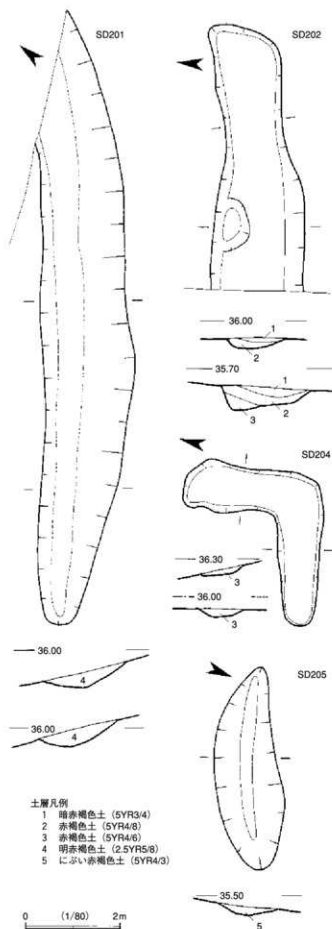
たとみられる平坦面に掘り込まれており、遺構検出の段階で瓦質土器插鉢片等が出土していることから中世以降の遺構と判断される。

溝

溝状の遺構が5条確認された。SD201・205は出土土器から弥生時代後期の遺構と考えられるが、これ以外は無遺物のため時期不詳である。

SD201 (第8図、図版8) 調査区西側斜面に位置し、等高線に対してやや斜交して構築される。検出全長約13m、上端の最大幅約2.0m、深さ30cm余りの溝である。埋土に含まれた土器(第16図9)から弥生時代後期の遺構と考えられる。集落を囲む環濠の一部である可能性を有する。

本遺構は平成4年度発見の環濠(弥生時代後期前半～中葉)とは時期が異なり、両者は直接関連をもつものではない。また本遺構は幅に比して浅く、V字型の断面形態を有する平成4年度発見の環濠と



第8図 溝実測図

は機能の面でも異なるものとみられる。

SD202 (第8図、図版8) 調査区南西部に位置する溝であり、基本的に等高線に直交する。検出全長約5.7m、上端の最大幅約1.9m、深さ20cmの規模である。無遺物であり、時期および機能は不明である。

SD204 (第8図) SD202と約12mの距離を隔てて存在するL字状の溝であり、東西部はSD202と平行する。基本的に等高線に直交・平行しており、南北方向の検出全長3.0m、東西3.2m、上端の最大幅約104cm、深さ20cm弱の規模である。無遺物であるため時期および機能は不明であり、SD202との関連も明確ではない。

SD205 (第8図) 調査区北端に位置し、尾根の鞍部を断ち切るように掘られた短い溝である。長さ4.3m、上端の最大幅1.4m、深さ20cm弱の規模である。埋土に含まれた土器から弥生時代後期の遺構と考えられる。

SD203 (第8図) 調査区中央部(丘陵最高所)に位置する長さ約3.2m、幅55cmの無遺物の溝であり、SK203との切り合いは明確ではない。時期および機能は不明である。

その他の遺構

以上の遺構のほかに、人為的な掘削とみられる部分が西側斜面(SX201・202)および東側斜面(SX203)に存在する。しかし、いずれも平坦部の奥行きが狭く、遺物がほとんど出土していないため段状遺構である可能性を指摘するにとどめる。

b) 埋葬遺構

石蓋土坑墓1基、壺棺墓2基、古墳3基がある。単独で存在する石蓋土坑墓を除けば、これらは調査区南東部に集中する。さ

らに、壺棺墓同士と古墳同士についても相互に隣接して存在する。なお、調査区中央部（丘陵最高所）には明治時代以降の墓地が存在し、これに伴う2基の墓坑が存在している（図版7）。

石蓋土坑墓

ST201（第9図、図版8）

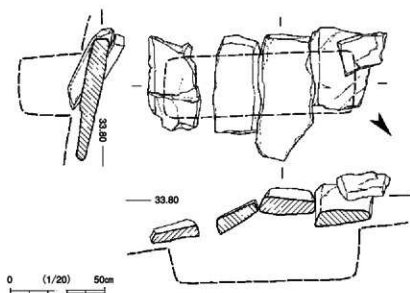
調査区北端の東側斜面に存在し、表土除去の開始時点で蓋石の一部が露出していた。

蓋石は5枚であり、西端の石は一部のみが残存である。蓋石の石材は中央の2枚（東から2・3枚目）は花崗岩、他は塩基性片岩の板石が利用されており、蓋石の構築状況は平成4年度発見の石棺墓（ST03）に比して簡略である。

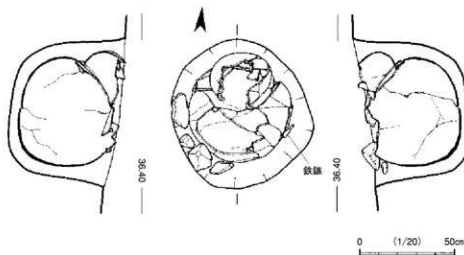
蓋石下部からは明確な墓坑を検出することができず、副葬品等の遺物も出土しなかった。あるいは、これら蓋石が本来の位置から若干移動している可能性もある。蓋石から推定するなら、墓坑は長さ1m以下、幅35cm以下であったとみられる。弥生時代後期ないし古墳時代前期の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

壺棺墓

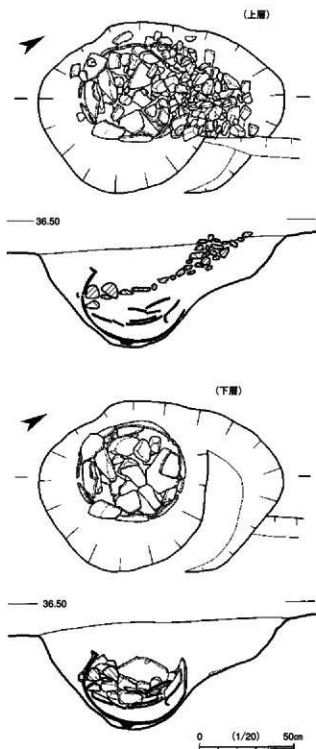
ほぼ同時期に営まれたとみられる2基の壺棺墓が、調査区南西部に約1mの距離を隔てて存在する。この地点周辺については精査を行い、これら以外の壺棺が存在しないことを確認した。



第9図 石蓋土坑墓（ST201）実測図



第10図 壺棺墓（ST202）実測図



第11図 壺棺墓 (ST203) 実測図

石器若干が出土しているが、図化・復元はできなかった。なお、棺の内外からは人骨・歯および副葬品とみられる遺物は発見できなかった。

弥生時代終末ないし古墳時代初期の遺構と考えられる。

古墳

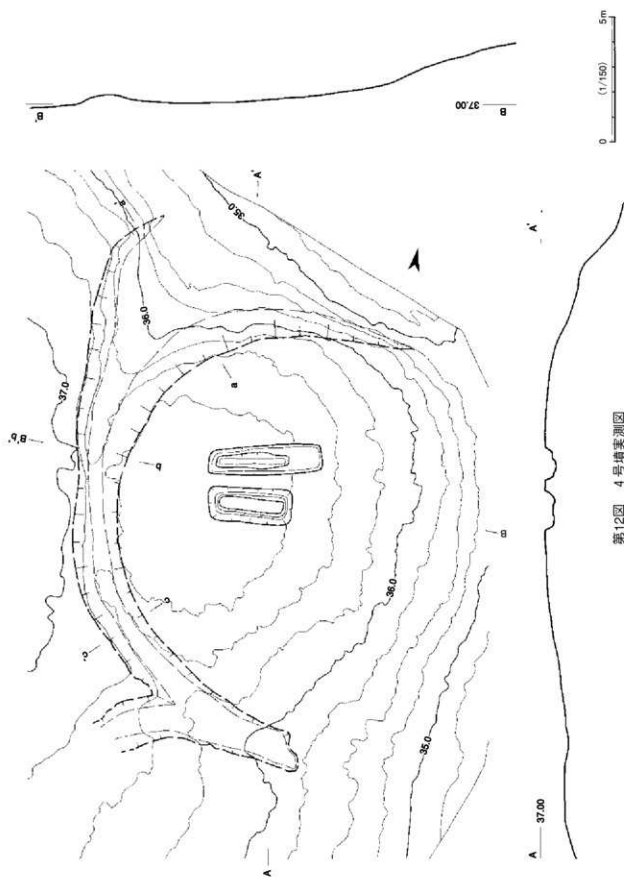
当初その存在が知られていなかったものの、遺構検出段階で新たに古墳3基が確認された。いずれ

ST202 (第10図、図版9) 壺を棺身とし、鉢を棺蓋として合せ口にした壺棺であり、直径約80cm、深さ60cm以上の墓坑内に斜位に埋置される。墓坑南西側には、棺の安定を意図したものとみられる数個の礫が充填されている。

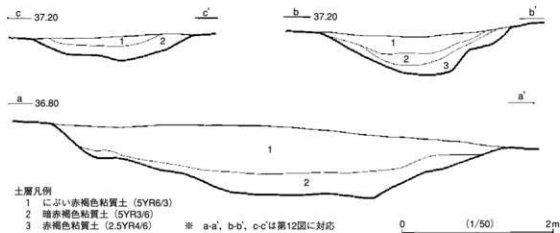
棺身の壺は頸部以上を打ち欠かれており、開口部の直径は30cm前後となっている(第17図18)。これを覆う棺蓋には口径約31cmの完形品の鉢が用いられている(第17図17)。棺内からは人骨・歯および副葬品は発見できなかったものの、南東側棺外から鉄鏃1点(第18図21)が出土した。弥生時代終末ないし古墳時代初期の遺構と考えられる。

ST203 (第11図、図版10) 石走山6号墳の周溝により東半上部を掘削される。検出時点で棺身となる壺の上部は破損しており、棺蓋は存在しなかった。壺の上位から墓坑内の北東側にかけて小円礫が覆っており、棺身である壺の一部は重ね合わされたような状態で棺内に遺存していた。この状況から、この壺棺墓は後世の攪乱を受けたものと考えられる。

棺身となるのは複合口縁壺であり、口縁部を打ち欠かれているものの頸部以下はほぼ完全に復元できた(第17図19)。壺は長径約130cm、短径約90cm、深さ60cm以上の墓坑内にほぼ直立して埋置される。棺身の壺以外にも蓋の一部とみられる土



第12图 4号填实测图



第13図 4号墳周溝土層断面図

も墳丘盛土は遺存せず、このうち2基については埋葬主体も確認できなかった。

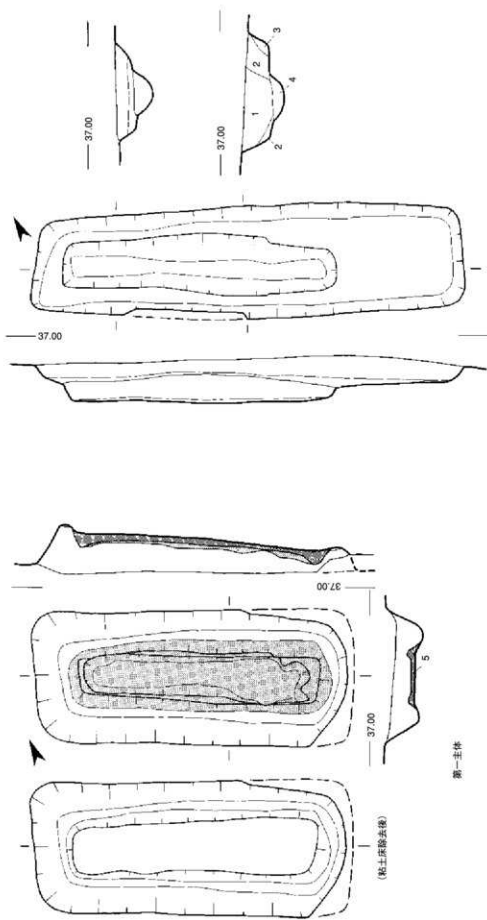
石走山4号墳 (第12～14図、図版11～14) 丘陵東側の緩斜面に築かれた、直径約15～16mの低墳丘の円墳である。丘陵の高位側(古墳西半)を掘削して周溝とし、墳丘を際立たせている。特に北側では周溝の最大幅約6m、深さ90cmにおよぶ。周溝南端部では隣接する石走山5号墳周溝と重なるが、切り合いを土層から判断することはできなかった。検出時点で墳丘自体に盛土は遺存せず、現状では見かけ上1.5m程度の高さである。周溝埋土中からは土器片が出土しているものの、供献ないし祭祀行為を窺わせる出土状況ではない。周溝底面付近から出土した土器片(第16図11・12)等から、本古墳は4世紀後半～5世紀前半の年代が想定される。なお、周溝埋土上位からは6世紀後半とみられる須恵器片が出土したことから、この時期まで本古墳の周溝は埋積していなかったと考えられる。

墳丘の中心から北西側にやや偏在して2基の埋葬施設が存在する。ここでは、2基のうち南側に位置し、墳丘の中心部に近いものを第一主体、その北側に築かれたものを第二主体とする。2基とも盗掘や攪乱を受けた痕跡はみられない。

第一主体は長軸3.3m、短軸1.4m、深さ最大50cmの隅丸長方形の墓坑をもち、主軸方位はN63°Wである。墓坑底面は壁面沿いを掘りくぼめて長軸2.8m、短軸0.75m、高さ約10cmの棺を造り出し、この上面をオリーブ黄色の粘土で覆って粘土床とする。粘土床の上面標高では西端に対して東端が10cm余り高い。粘土床上面は長辺・短辺とも周囲がなだらかに隆起することから、粘土床上に据えられていた木棺は船形に近い底面形状をもっていた可能性が高い。なお、この第一主体の埋土中、粘土床上面、粘土中のいずれからも遺物は出土しなかった。

第一主体にほぼ平行して築かれた第二主体は長軸4.55m、短軸1.2m、深さ25～30cmの隅丸長方形の墓坑をもち、主軸方位はN67°Wである。墓坑は2段掘りとなっており、木棺据え跡とみられる長軸2.7m、短軸0.55～0.6m、深さ25～30cmの掘り込みが墓坑底面にみられる。この掘り込みは東端付近ではやや不明瞭であったが、その断面形態から推測するなら、割竹形木棺が据えられた可能性が高い。第二主体には粘土床はみられず、遺物もまったく出土しなかった。

副葬品が出土していないことから、2基の埋葬施設における被葬者の頭位方向を明確に示すものはない。2基の墓坑および第一主体の粘土床の幅ではともに東側がやや広いこと、第一主体の粘土床は

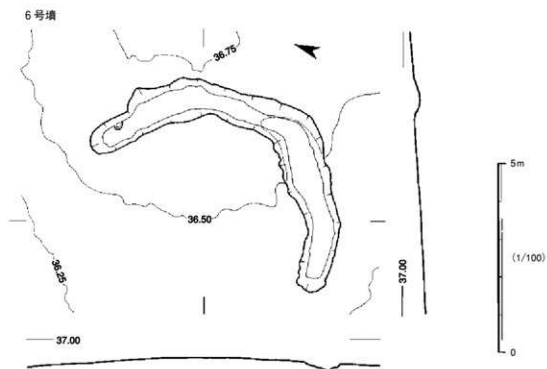
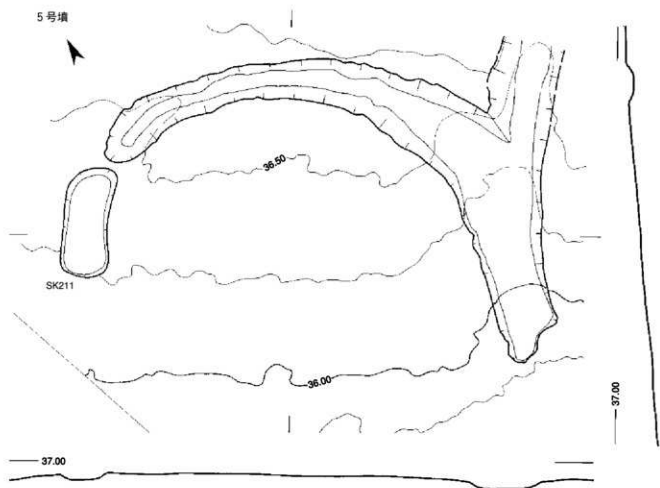


土層凡例

- 1 赤褐色粘質土 (2.5YR4/6)
- 2 明赤褐色粘質土 (2.5YR5/8)
- 3 赤褐色土 (5YR4/8)
- 4 赤褐色土 (2.5YR4/6)
- 5 オリーブ黄褐色土 (5YR6/4)

※ 網掛け部は赤粘土を示す

第14図 4号墳埋葬主体実測図



第15図 5・6号墳実測図

東に高いことなど頭位が東である可能性を示す要素がある。その反面、2基の墓坑は西辺をそろえて構築されていること、丘陵斜面の下位側である東に頭位を向けるのは自然ではないことなど、頭位が西であることを想定させる要素もある。

石走山5号墳（第15図、図版15） 丘陵南東側の緩斜面に築かれた、直径約10mの円墳である。丘陵の高位側（古墳北東側）に掘削された周溝によってのみその存在が認識できる。周溝は幅0.9～2.0m、深さ20～30cmである。周溝南東側では隣接する石走山4号墳と周溝の一部を共有する。盛土は遺存せず、埋葬施設も確認できなかった。

周溝底面付近から土器片（第16図13・14ほか）が出土し、4号墳に比較的近い年代が想定できるが、詳細な年代を決定する資料とはならなかった。

石走山6号墳（第15図、図版15） 丘陵南側の緩斜面に築かれた、直径約6mの円墳である。丘陵の高位側（古墳東半部）に掘削された周溝によってのみその存在が認識できる。周溝は幅0.8～1.20m、深さ20～30cmである。盛土は遺存せず、埋葬施設も確認できなかった。

周溝底面付近から須恵器杯蓋片（第16図15）が出土したことから、6世紀後半の年代が想定できる。

なお、本古墳周辺で遺構検出を行った際にも数点の須恵器片（第16図16ほか）が出土しており、これらも本来は本古墳に伴うものであった可能性が高い。

2) 主な遺物

今回の発掘調査では、遺構検出の段階から出土遺物の少ないことが認識されていた。最終的な総量は、2基の壺棺を除けばコンテナ2箱に納まる。これは、調査区一帯が基本的に集落遺跡ではなく墓域であったことに起因するものと理解できる。

a) 土器

第16図1～8はSB201出土土器である。いずれも胎土は粗く、表面が剥落するものが多い。1は壺、2は鉢、3～9は甕である。鉢および甕では基本的に外面ハケ調整、内面ヘラ削りを行い、底部脇に指押えの痕跡が顕著である。弥生時代後期前葉ないし中葉に位置付けられる。

第16図9はSD201出土の甕である。弥生時代後期後半段階の遺物である。

第16図10はSK203出土の甕である。器体は薄く、口縁端部は明瞭な面をなす。弥生時代終末期ないし古墳時代初期の遺物と考えられる。

第16図11・12は4号墳周溝出土土器である。11は甕または鉢であり、体部外面は剥落するが内面にはヘラ削りが顕著にみられる。古墳時代前期の遺物と考えられる（内面ハケの消失）。12は器種不明の土器であり、裾部の復元径は20cm前後となる。外面は丁寧なナデ、内面はハケによる調整を行う。大型の壺口縁部の可能性もある。

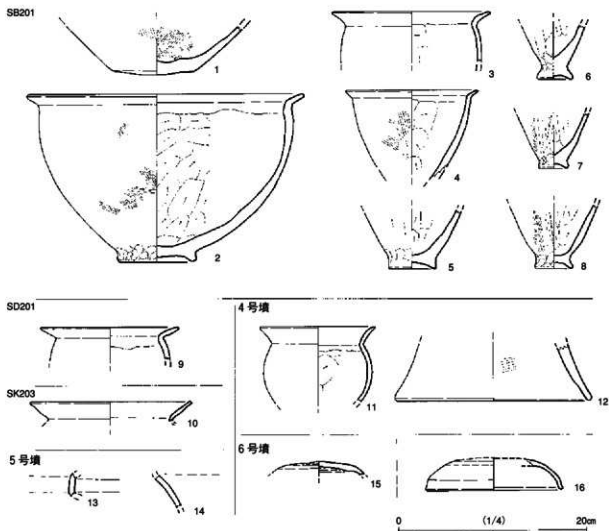
第16図13・14は5号墳周溝出土土器である。13は複合口縁壺の頸部、14は壺肩部片であるが、詳細な時期は不明である。

第16図15は6号墳周溝出土土器である。須恵器杯蓋であり、6世紀後半段階の遺物とみられる。

第16図16は遺構検出の際に6号墳周辺から出土した須恵器である。陶邑編年におけるⅡ型式4段階の杯蓋であり、6世紀後半に比定できる。

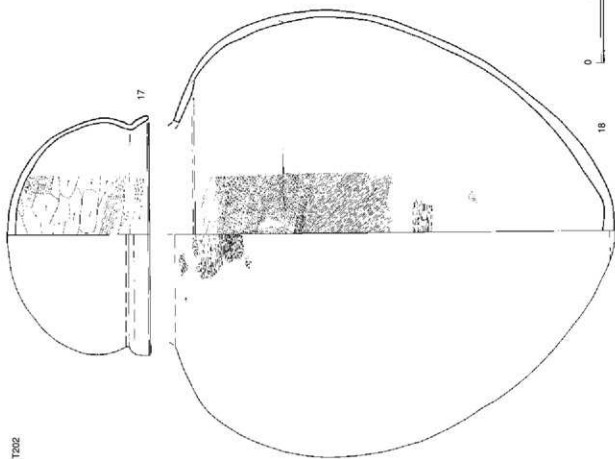
第17図17・18はST202（壺棺墓）に利用された土器である。17は壺棺の蓋に転用された鉢であり、外面は剥落のため調整痕をとどめない。内面は粗いハケ調整を行い、体部中・下位ではそのちへら削りを行う。口径31cm、器高19cmである。18は壺棺の棺身に利用された壺である。口縁部および頸部を欠失しており、体部最大径59cm、残存高58cmである。外面は剥落が多いものの、基本的には内・外面とも比較的細かいハケによる器面調整を行う。内面の一部には粘土帯の継目が残る。弥生時代終末期ないし古墳時代初期の遺物と考えられる。

第17図19はST203（壺棺墓）の棺身に利用された土器である。口縁上部を欠失した複合口縁壺であり、残存高63cm、最大径54cm、頸部の最小内径15cmである。外面は剥落部分が多いものの、基本的には内・外面とも比較的細かいハケによる器面調整を行う。弥生時代終末期ないし古墳時代初期の遺物と考えられる。

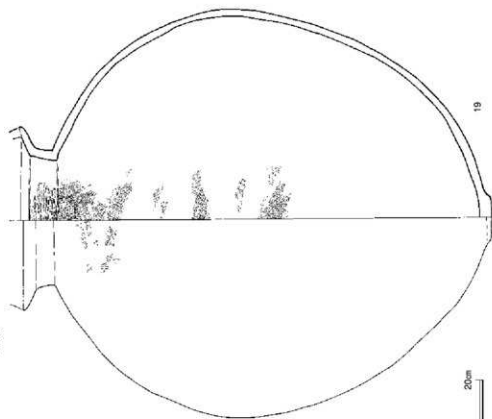


第16図 出土遺物実測図 (1) 竪穴住居跡・溝・土坑・古墳・その他

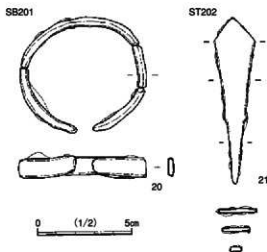
ST202



ST203



第17図 出土遺物実測図(2) 壘棺



第18図 出土遺物実測図 (3) 鉄製品

b) 鉄製品

第18図20はSB201出土の鉄釧である。4片に折れて出土したが、ほぼ完形に復元できる。幅1.0cm、厚さ0.3cmの長方形に近い断面をもつ細長い鉄板を、外径6.2~6.6cm(内径5.3~5.8cm)の環状に曲げて成形する。鉄板の両端隅は丸みを帯びており、重ね合わせない。

第18図21はST202から完形で出土した鉄鎌である。全長7.8cm(鎌身部長5.4cm)、最大幅2.1cm、鎌身部最大厚0.23cmの主頭鎌である。関部はわずかな段を成しており、矢柄の痕跡等はみられない。

4 まとめ

発掘調査の結果、今回の調査区には弥生時代後期の集落の一部と、弥生時代終末から古墳時代後期にかけての埋葬遺構その他が存在することが判明した。ここでは、調査で得られた主要な知見を整理してまとめたい。

弥生時代後期の鉄釧

SB201出土の鉄釧は弥生時代後期前葉~中葉の遺物であり、山口県域では今回初めて発見された。一般的に、鉄釧は弥生時代後期になって登場するもので、貝輪ないし青銅製腕輪の代替品とされており(川越1993)、弥生時代(終末~古墳時代初頭の例を含む)の鉄釧は群馬県で2遺跡18例、千葉県で3遺跡3例、東京都で5遺跡7例、神奈川県で3遺跡3例、長野県で10遺跡65例、静岡県で1遺跡1例、佐賀県で1遺跡6例、長崎県で2遺跡2例が知られている(川越編2000)。したがって、現段階ではSB201出土の鉄釧は本州西半では唯一の例となる。大半を占める関東および長野の例は、時期的には弥生時代後期後半~終末期に属し、本遺跡の例は神奈川県・長崎県の遺跡(大原遺跡、受地だいやま遺跡、E5遺跡、大浜遺跡)とともに早い段階に位置付けられる。また、鉄釧の大半は副葬品として発見され、本遺跡のような住居跡からの出土例は長野県・五里田遺跡、同・松原遺跡、同・篠ノ井遺跡群など少数である。

本遺跡において鉄釧が出土したSB201(方形竪穴住居跡)は、平成4年度調査区で発見された弥生時代後期の環濠集落と並存する遺構である。SB201はこの環濠の外にあり、規模も環濠内の円形竪穴住居跡(直径4~5m)に比して大型(幅7.1m)である。鉄釧をもつ人物がその集団の司祭者であるなら(川越1993)、SB201は司祭者の居所または集団の祭祀場であったとみることができよう。

4号墳の年代

4号墳は副葬品をもたないため、築造年代を考える手掛りとなるものは埋葬主体の構造と周溝出土土器以外にはない。埋葬主体では第一主体にみられる粘土床が最も特徴的である。これは墓坑底面の

周囲を掘りくぼめて造り出した棺台上に粘土を敷くもので、県内では類例がない。粘土床は至近の位置にある国森古墳でも採用されているが、その構築法は異なる。4世紀初頭に位置付けられる国森古墳の大型墓坑底面には白色粘土による粘土床が設けられ、その中央に箱型木棺の痕跡をとどめる。粘土床の構築法からは国森古墳と4号墳の連続性を認めることはむずかしく、むしろ本古墳の粘土床は畿内型の定式化した前期古墳の竪穴式石室の構築法に通じる。このことから、本古墳は定式化した前期古墳登場以後の構築とすることができ、4世紀後半をさかのぼらないものと考えられよう。

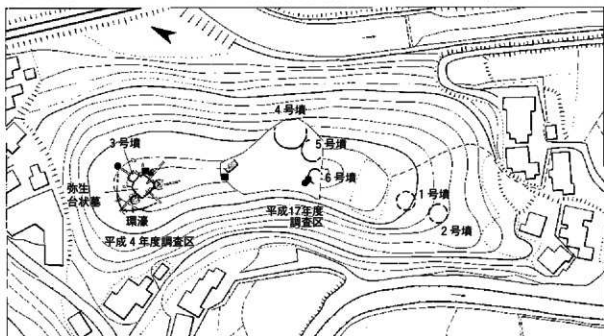
周溝出土土器のうち第16図11は形態的には弥生時代終末に位置付けられる吹越式土器の系譜を引くものであるが、内面をヘラ削りとし、ハケ調整痕がみられないことは後出的要素である。この器形は本県では5世紀代まで存在することが知られているが、この土器自体は器壁が比較的薄く、古相をとどめられていると考えられる。したがって、この土器は4世紀初頭までさかのぼらず、おそらく5世紀後半には降らないという年代幅をもって捉えられる。

以上の2点から判断すれば、4号墳の築造年代は4世紀後半～5世紀前半として大過ないであろう。

墓域としての石走山丘陵（第19図）

石走山丘陵では今回の発掘調査以前に丘陵北端の集落跡および墳墓群（平成2～4年度）、丘陵南端の石走山1号墳（平成2年度）が調査されている。また、1号墳の南には2号墳の存在が指摘され（山本1991）、1号墳と6号墳の間の尾根上には低墳丘古墳の存在を想定させるわずかな高まりもみられる。今回の調査所見にこれらを加味すれば、丘陵全体を弥生時代後期後半から古墳時代後期にわたる、ひとつの墓域として理解することができる。

石走山丘陵における遺構の構築時期と分布状況を整理すると次のようになる。まず、南北に長い丘陵北端に環濠を伴う小集落が弥生時代後期前半に形成され、その廃棄後、後期後半にこの地区は墓域となる。最初に造られた墓は方形台状墓（平成4年度ST01）である。これに続き、土坑墓・石棺墓・石蓋土坑墓がつくられるが、これらには方形台状墓に隣接してつくられるものと単独のものがみられ



第19図 石走山丘陵における遺構の分布（1/2000）

る。壺棺墓（弥生時代終末～古墳時代初期）もつくられるが、これらは既存の墳墓から距離を置いて存在する。壺棺墓の一部は丘陵中央部にもつくられ、墓城の南への拡大がみられる。続いて前期の小方墳である3号墳が方形台状墓に隣接してつくられる。そして、4号墳の出現（4世紀後半～5世紀前半）を契機に円墳の築造が丘陵中央部で始まり、5・6号墳が後続する。これまでの古墳はすべて低墳丘である。円墳の分布はさらに南へ拡大し、6世紀末～7世紀初めには丘陵南端付近に1号墳が築造される。この古墳では横穴式石室が採用され、この古墳（または2号墳）を最後として石走山丘陵の古墳築造は終わる。

この流れは、墳丘をもつ個人墓の築造が弥生時代後期後半に方形原理に基づいて開始され、4世紀後半～5世紀前半に円形原理に転換し、6世紀末～7世紀初めに横穴式石室導入によって家族墓に移行する、と要約することができる。同様のことは山口市朝田墳墓群Ⅱ地区でもみることができ、ここでも墳丘をもつ個人墓の築造が方形原理に基づいて開始され（古墳時代初期）、低墳丘の前方後円墳の築造を契機に円形原理に転換し（5世紀中葉）、横穴式石室の採用により家族墓に移行する（6世紀前半）。下関市沖台遺跡、山口市上の山古墳群、周南市岡山遺跡などにみられるように、山口県域においては墳丘を有する特定個人（家族）墓の多くは弥生時代終末～古墳時代初期に登場するが、これらはすべて方形原理に基づく。こうした方形原理を円形原理に転換させる契機となるのは、その集団および地域社会の前方後円墳体制への編入であるとされる（都出1992）。石走山遺跡についてみれば、この転機は典型的な畿内型前方後円墳である柳井茶臼山古墳（墳長90m、4世紀末）とのかかわり抜きには考えられない。熊毛郡域で最初に築造された前方後円墳であるこの古墳の登場を契機として、石走山丘陵を墓城とした集団もまた前方後円墳体制へ編入されていったとみてよいであろう。

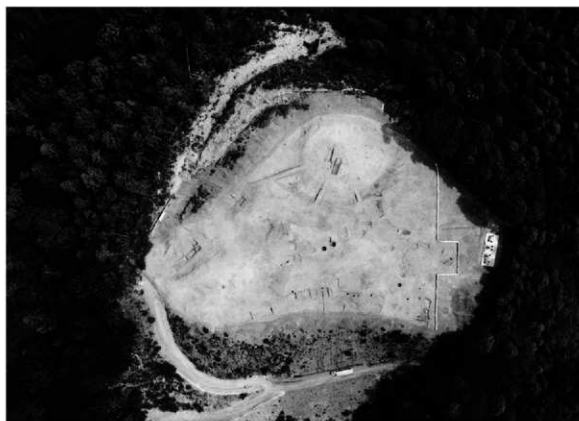
以上のことから、山口県域においても6世紀前半までは首長墳と呼べる古墳を除けば、有力な集団であっても一般構成員の墓は低墳丘が一般的であり、こうした小古墳にも前方後円墳体制の影響が及んでいたことが確認できる。そして、低墳丘古墳に終始することは同様であるものの、小型前方後円墳（13号墳、墳長24m）や銅鏡副葬などの要素をもつ朝田墳墓群Ⅱ地区に比して、石走山丘陵を墓城とした集団はより下位にあったことが明らかである。まさに、石走山遺跡の低墳丘古墳群は前方後円墳体制における「墳丘をもつ墓の最底辺」（都出1992）の姿を見せていると理解することができる。しかし、その一方で石走山1号墳の石室（全長8.7m、玄室長4.4m、玄室高2.9m）はその規模からみれば山口県域においても大型の部類に属し、副葬品の面で決しても劣っていない。したがって、石走山丘陵を墓城とした集団は6世紀末に至って社会的・経済的な地位向上を果たしたのであり、地域社会の再編が起こったとみることができよう。そしてこれは、周防国造家の墓ともいわれる後井1号墳が田布施川を隔てて石走山丘陵と向い合う位置に築造されていることと無関係ではないであろう。

参考文献

- ・川越哲志「弥生時代の鉄器文化」1993年。
- ・川越哲志編「弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）」2000年。
- ・都出比呂志「墳丘の型式」「古墳時代の研究」（第7巻古墳Ⅰ墳丘と内部構造）1992年。
- ・山口県教育委員会・建設省山口工事事務所「朝田墳墓群Ⅱ」1983年。
- ・山本一朗「石走山第一号墳清堀調査略報」『会誌田布施地方史研究会』1991年。
- ・山口県教育委員会「石走山遺跡」1993年。



遺跡遠景（上：南西上空より、下：西上空より）



遺跡全景（上：石走山丘陵と調査区、下：調査区全景）



遺跡遺景および調査前近景 (左上：西より、右上：北より、左下：北より、右下：南より)



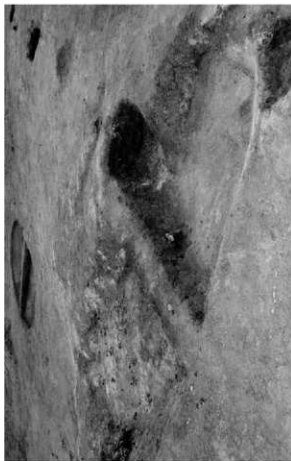
竪穴住居跡 (SB201) 調査状況 (上段：除去状況、下段：掘込み状況)



豎穴住居跡 (SB201) 完掘狀況



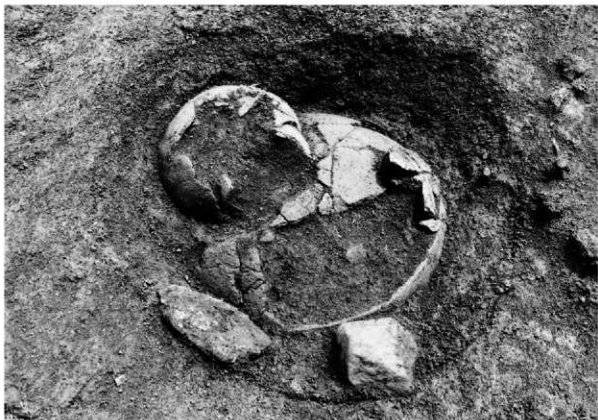
整穴住居跡 (SB201) 遺物出土状況および掘立柱建物跡 (SB202、右下)



土坑その他（左上：調査区中央部付近、右上：近代墓坑、左下：SK202、右下：SK204～207）



溝および石葺土坑墓 (左上: SD201、左下: SD202、右上: 右下: ST201)



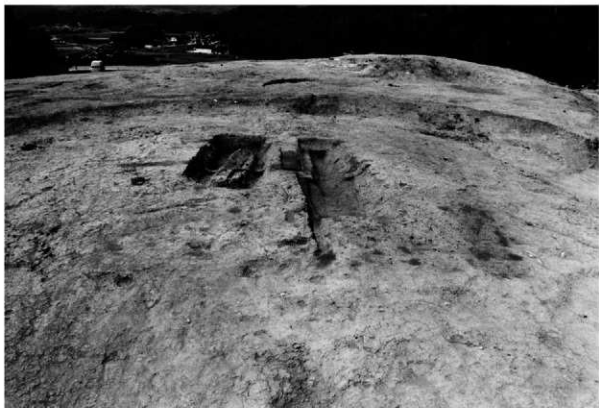
壺棺墓 (ST202) (上：検出状況、下：鉄釘出土状況)



壺棺墓 (ST203) (上: 検出状況、下: 壺棺出土状況)



4号墳検出状況（上：東より、下：西より）



4号墳完掘状況（上：東より、下：西より）



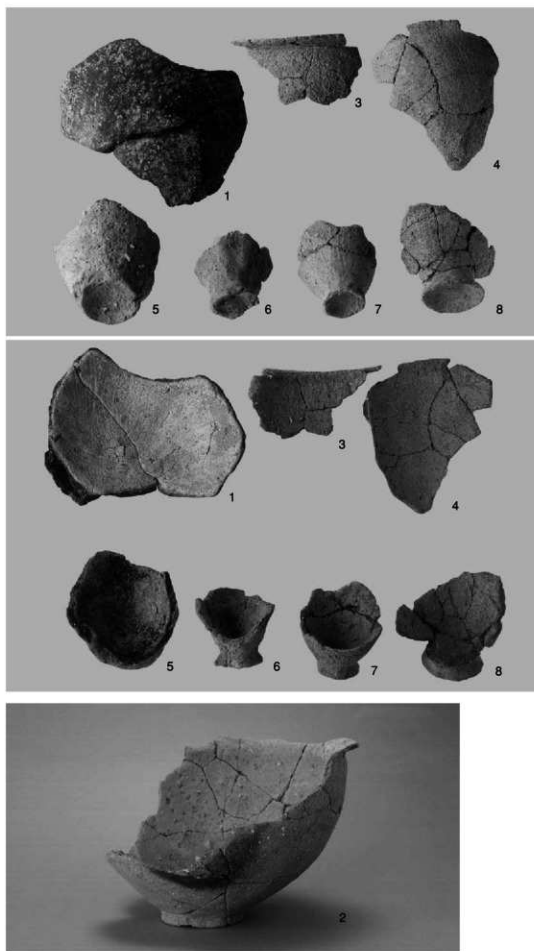
4号填土层堆积状况 (左上·右下:周溝、左下:第一主体、右下:第二主体)



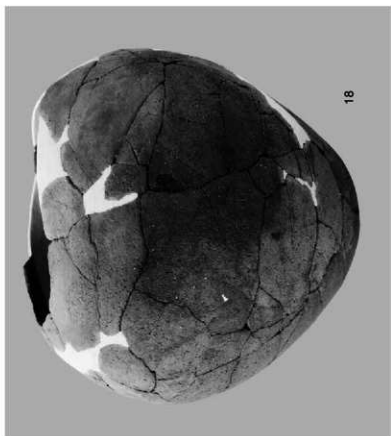
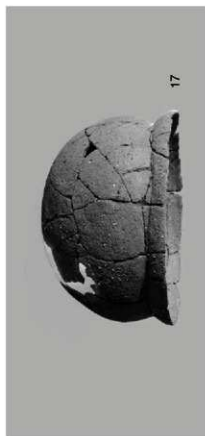
4号墳埋葬主体（上：並列する埋葬主体、左下：第一主体粘土床、右下：第一主体完掘）

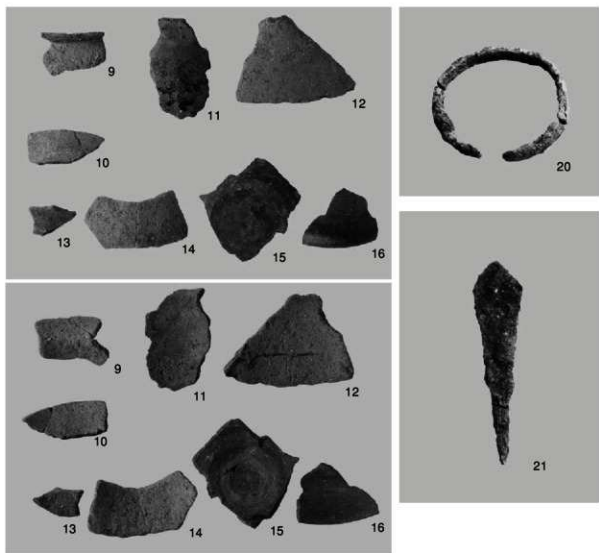


5・6号墳完掘状況（上：5号墳、下：6号墳）



出土遺物 (1) 豎穴住居跡





出土遺物 (3) 溝・土坑・古墳・その他

報告書抄録

ふりがな	いしばしりやまいせき
書名	石走山遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第55集
編集著者名	岩崎仁志 森下穂雄
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2006年3月24日 (平成18年3月24日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° 〃 〃	東経 ° 〃 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしばしりやまいせき 石走山遺跡	やまぐちけん 山口県 くまのりゅう 熊毛郡 たふせちやう 田布施町 おほなごがわに 大字川西	3534		33 57 44	132 1 20	20050523 } 20050902	1,500	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
石走山遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	1	弥生土器	古墳は低墳丘
	埋葬跡		土坑	18	鉄剣	
古墳時代		壺棺墓	2			
	石蓋土坑墓	1				
	円墳	3	土師器 須恵器 鉄鎌			

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第55集

石走山遺跡Ⅱ

2006年3月

編集・発行 財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
印刷 株式会社 中央印刷社
〒753-0871 山口県山口市朝田48-1